

科学委員会に助言を求めた事項

平成 27 年度小笠原諸島世界自然遺産地域科学委員会に対し、地域連絡会議より以下の助言を求めた。

オガサワラオオコウモリとの共生に係る地域課題 WG での検討

(基礎情報)

国の天然記念物

国内希少野生動植物

IUCN レッドリスト CR

環境省レッドリスト絶滅危惧 I B 類 (EN)

(背景)

平成 8 年、父島の農園で 28 頭のオガサワラオオコウモリがハウスのネットに絡まり、計 2 頭が死亡する事故が発生した。本件の特徴は、「天然記念物の保護」と「農業（産業）被害」という 2 つの側面を併せ持つことであり、これを契機に、共生の議論が開始された。

平成 22 年に、種の保存法に基づく国の法定計画として保護増殖事業計画が策定されて以降、関係機関・団体による連絡会議が開催されてきたが、課題の情報共有に留まり、具体的に事業ベースへの着地を目指した会議ではなかった。そんな中、平成 25 年度の地域連絡会議では、食害対策など人間生活との軋轢解消とオオコウモリ保護の両立が強く求められた。そこで、人とオオコウモリが共生するための軋轢を解消し、具体的な課題の解決を目的とした「オガサワラオオコウモリとの共生に係る地域課題 WG」を立ち上げた。

(今年度第 1 回地域課題 WG での検討要旨)

本種の父島における個体群の生息数は増えつつあると推定されるが、同時に農作物への被害が発生している。農業者からの意見として、作物全てをネットで囲うことは非現実的で「共生」の形が見えず、コウモリが絶滅してもよいと考える農業者もいる中で、適正個体数が知りたいとの意見が挙がっている。

軋轢を解消するための対策として、小笠原村の食害対策事業は重要であり、さらなる技術改良に努めてもらう。一方で、地域課題 WG では、地域社会の許容量を上げるためのその他の施策を検討するが、議論する前提として生物学的に必要な数（＝絶滅を防ぐために必要な数）、自然再生上必要な数（＝生態系における機能発揮に必要な数）について、科学的な評価、助言を得たい。なお、現在の父島では、社会的に許容できる数を超えつつあるというのが農業者の認識である。

(助言を求める事項)

科学委員会において、助言を頂きたい事項は以下のとおりである。

- 生物学的に必要な数、自然再生上必要な数についての、科学的な評価、助言。
- 適正個体数に関する科学的議論を行った上での、余剰個体の扱いの検討（例：無人島へのねぐらの移動の可能性等。）
- 外来植物駆除や、農作物を困うことで奪った餌資源だけでも補完する方法を考えることの一環として、人工餌場を作ることの是非や、実施する際の条件についての助言。
- 科学委員会で結論が出ない論点についての、今後の議論の受け皿に関する助言（本来コウモリの保護増殖事業検討会が作られて議論されるべきとの意見も挙がった）。

また、外国から父島二見港に船舶が寄港することに関し、外来生物の持ち込みについて話題に上げてほしいとの要望があり、新たな外来種の侵入・拡散防止に関する WG の「その他」の議題中「外国から二見港への入港について」で取り上げた。

WG においては、意図的な持ち込みに対する法規制はあり、個別に制度の周知が行われることが報告されたが、制度の適正な履行のチェックの必要性や、非意図的な導入に対応する仕組みの必要性が指摘された。